九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 電子ネットワークの変容と公共圏

杉山, あかし
九州大学比較社会文化研究院

https://doi.org/10.15017/8664

出版情報：比較社会文化. 11, pp.1-13, 2005-02-20. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化』第11巻（2005）1～13頁
*Bulletin of the Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University*
vol.11（2005), pp. 1～13

# 電子ネットワークの変容と公共圏

The Potential of Internet as Public Sphere: a case study

杉　山　あかし
Akashi SUGIYAMA

キーワード：　公共圏，コミュニケーション的理性，インターネット，2ちゃんねる

……地域的な公共性と地域を越えた公共性，文学的，科学的，および政治的公共性，党派内部でのあるいはそれぞれの団体に特殊の公共性，メディア依存型の公共性やサブカルチャー的な公共性など，分化が高度に進んだネットワークの形成が可能となる．……（略）……それぞれの公共性は他の公共性に対して開かれているわけである．公共性のほとんど気づかれない普遍主義的傾向は，その討議（ディスクルス）にもとづいた構造によっている．部分部分の公共性はすべて，包括的な公共性を指示しているのであって，この包括的な公共性においては，社会全体が自己に関する知を形成しているのである．

J．ハーバーマス『近代の哲学的ディスクルス』(1)

電子ネットワーク上に新たな“公共圏”が形成される可能性について，筆者は注目してきた．そして，パソコン通信NIFTY-Serveのいくつかのフォーラムにおいて，公共圏形成への方向性を見いだした.(2) しかし，当時から「今後の研究課題」としてきたことの一つが大衆化の問題である．わが国で最も早く一般コンシューマー向け電子ネットワークサービスを開始したネットワーク企業の一つであるNIFTY-Serveの，比較的早期の電子ネットワーク利用者たちが生み出した電子ネットワーク利用形態において，公共圏の萌芽のようなものが認められたとして，その後の電子ネットワークの全社会的普及／大衆化段階において，この利用形態は持続・発展したのであろうか．それとも雲散霧消したのであろうか．あるいはこういった次元では語り得ない，異なった言説状況が生み出されたのであろうか．本稿はインターネット上の巨大掲示板「２チャンネル」の分析を通して，この問題を考察するものである．

## １．分析の枠組み

今日のネットワーク・コミュニケーション分析においてしばしば用いられるのが，ハーバーマスの「Öffentlichkeit（公共圏）」概念である．社会によって“公”とされること，あるいは，“公の場”，すなわち，「公共圏」のあり方は様々に変わるが，今日の民主主義社会では，人々が意見表明や議論を行なう場が公共圏の一翼を担っていることは間違いない．民主主義の存立基盤は，人々が，意見表明や議論を行なうことによって形成される「世論」（public opinion＝公衆の意見／公共の意見）だからである．ハーバーマスは『公共性の構造転換』（1962年刊行）において,(3) 近代的な公共圏を市民社会論と結びつけ「市民的公共圏」と呼んだ．国家権力や経済システムの支配・誘導に対抗して，人々が市民として連帯し，自らの価値観の世界を作り，国家や経済の支配に抵抗して，社会を進展させて来た場が「市民社会」として議論されて来たものだからである．

かつて，世論の媒体となって来たのはマス・メディアであったが，現代では，電子ネットワークがこれに代わる可能性を持っているということが注目されている．電子ネットワークは，人々が直接コミュニケーションに参加できる媒体である．媒介者によって歪められることのない世論形成の可能性が啓けてきたのではないか，ということが期待される．商業テレビ放送や映画はもちろん，比較的「良心的」と評されることの多い高級紙（新聞）や公共放送であっても，商業的に営業されるものは経済法則の支配を受け，また政府機関と何らかの関係の上で成立するものは政治的に様々な圧力を受け，無色透明なメディアとして人々を媒介しているとは考えにくい．電子ネットワークであれば，人々が自ら生の声を集積することによって，こういったものによって歪められることのない世論を形成できるのではなかろうか，と考えられるのである．

ただし，あらかじめ断っておけば，電子ネットワーク・

コミュニケーションの場を「公共圏」と呼ぶのは，現状では必ずしも適切ではない．「公共」であるのか，そうでないのかは，その社会における定義に依存する．現在，電子ネットワーク・コミュニケーションは，未だ「公共の意見＝世論」の場としての認知を受けているとは言い難い．「ネット」「言論」「匿名」「無責任」といったキーワードを組み合わせてネット検索なり新聞記事検索なりを行なってみれば明らかなのだが，ネット上の議論は，常にある種の「うさん臭さ」を持って見られていることがわかる．誰でも書き込め，また誰が書き込んだのかが一見わからないように見える「言論」は，無責任なものであると考えられているようである．

ここで付言しておけば，実際は電子ネットワーク上の書き込みは非常に簡単に書き手をトレースでき，「匿名性」と呼べるような状況は成立していないのが普通である．マス・メディアが大きく取り上げたネット絡みの犯罪事件で，犯人が検挙されなかったことがあっただろうか．もちろん用意周到に，書き手が自らを特定されないように仕掛けることはできる．しかし，それは電子ネットワークの問題というよりは，パスポートの偽造のような，それ自体犯罪的な行為であることがほとんどである．プロバイダに虚偽の申告をしてIDを獲得する，あるいは，全く第三者のIDやパスワードを使ってログインする，といった行為は，電子ネットワークの問題ではなく，単なる詐称・書類偽造・詐欺といった問題である．

「しかしそれにしても，IDやIPアドレスなどをトレースできても，現実にどこにいて何をやっている人か特定できないではないか」，といったことも主張される．しかしこれも奇妙な主張である．例えば私たちは，自分の命を時に預けてしまう自らの主治医についてさえ，住所や自宅電話番号を知っていることはまずない．社会的に提示される個人情報は常に不完全な一部分に過ぎないのが当たり前なのであって，個人情報が一部分しか入手できないのはネット上だけの話ではない．

「だが，医者ならば病院へ行けば本人を捕まえることもできるが，ネットではそうは行かない」といった反論があるかもしれない．しかしこれもやはり状況はネットでも同じである．IDの発行元のプロバイダなり組織・機関へ行けば「捕まえる」ことができるのである．もちろん，プロバイダが実際に個人情報を開示するかしないかは，病院が所属の医師の個人情報を開示する必要があるかないかを判断する過程と似たステップを必要とし，必ずしも個人情報がすんなり獲得できるわけではないが．一般的に言えば，ネット利用のスキルの不足によって，情報がうまく取得できないいらだちが「匿名性」といった言葉の濫用を促進しているように見える．

いずれにせよ，定型的な言い回しとして，「ネットの匿名性」，さらには「匿名性の恐怖」といった言葉は定着しており，現在のネット上の書き込みに与えられた社会的定義を明らかにしている．すなわち，ネット上の書き込みは，「公共的」と言うには，まだ充分な資格を持っていないのである．

しかしそれにもかかわらず「公共圏」という用語を使ってネットワーク上の書き込みを議論する研究は多い．[4] ここにはハーバーマスの「公共圏」概念の多義性が作用している．既に記したとおりハーバーマスは，まず当該社会において「公共的」とされる事についてÖffentlichkeitという言葉を使用し，次に，近代化の理念，あるいは，彼の理想を表わす言葉として，市民的公共的議論の場に（そして，後に触れるように自律的公共圏という理念において）Öffentlichkeitという言葉を使用したのである．後者の意味では，ハーバーマスの理想の何らかの要素が体現されていれば，電子ネットワーク上の書き込みを「“公共圏”的」と表現することは可能であろう．ここで問題は，それではハーバーマスの理念のどの部分を取り上げて「公共圏」という議論を組み立てるのかということになる．

「公共圏」という議論を組み立てていく第一の立場は，『公共性の構造転換』に読み取ることのできる公共圏の要素を取り上げて「公共圏」を規定していくものであろう．

> ……（略）……，「意見」は「公論｛public opinion｝」のように教養（と財産）という前提条件に制約されていない．[5]
>
> ［｛　｝内は引用者補足］

市民的公共圏についての議論において述べられるこの一文は，裏返して読むと『公共性の構造転換』におけるハーバーマスの図式を単純明解に表わしている．すなわち，人々の単なる意見が，参加者に教養と財産があるという前提条件を満たした上で，議論の場で討論されることにより，民主主義の基盤である世論public opinionになる，という図式である．なぜ教養と財産が要求されるかと言えば，教養は議論の蓄積的理解を可能にし，財産のあることは個別利害にとらわれない議論を可能とするからである．このようにして「公共的な意見public opinion」を産み出していく場こそが「公共圏」である．こうして産み出された世論は，単なる「意見」とは違う権威を獲得し，政治という「公共的とされるもの」を動かしていくことになる．

この図式に則れば，現代の電子ネットワークが公共圏たり得るかという問題は，①参加者が個別利害を離れ，②蓄積的に議論を積み上げ，③世論を産み出しているのか，という問題であることになる．最後のポイント③，“（権威あ

る）世論を産み出す”という点については，既に述べたように「ネットワーク上のいかがわしい議論」という見方がある以上，成立していないと考えるほかない．しかし，その前の２つのポイントについては，電子ネットワーク上の言説をポジティブに評価してみることも可能であるだろうし，その意味で電子ネットワーク上の言説について「公共圏」的という議論を組み立てていくことも可能であろう．

ところで，これとは別の方向で“「公共圏」性”を定式化していく，第二の立場も成立し得る．

> 六〇年代の末以降，西洋合理主義の遺産がもはや必ずしも妥当しない状況に，西洋社会は近づいている．(6)

字面どおりにこの言葉を読めば，ある種の驚きを感じざるを得ないだろう．「近代主義者」として知られるハーバーマスが，西洋近代合理主義否定ともとれる，このようなことを記しているのである．もちろん，ハーバーマスが評価するのは現実の近代ではなく，近代の成立期において抱かれた（と考えることのできる）理想，あるいは実現され損なった「未完の近代」であるので，この言葉もその一環として読めば，形骸化した西洋合理主義の限界を指摘しただけだということになるかもしれない．しかしそれにしても，ここで問題となってくるのは，「もはや妥当しない」ものの中に市民的公共圏，あるいは，それについての議論の中で彼が論じたこと，が入っているのか，という点である．もしも彼がかつて議論したことが「もはや妥当しない」ものであるならば，それに則って電子ネットワークの「公共圏」性を論じても意味はないことになる．（もちろん，本当に妥当しないのか，それともハーバーマスのこの時点での認識に関わらず，依然として『公共性の構造転換』時点での認識が妥当するのかについて，別に検討を加えることは可能である．しかし，市民的公共圏の議論が「もはや妥当しない」ものの中に入るのであれば，無反省にハーバーマスの議論を適用することは困難となる．）「公共圏」という言葉自体はその後もハーバーマスが使い続けた言葉であるので，電子ネットワークの“公共圏”性は論じることに意味があるとして良いと思われるが，もしも議論の大部分が「もはや妥当しない」ものであるならば，本稿で記した公共圏に関する第一の議論組み立てとは別の基準で，“「公共圏」性”を論じなければならないだろう．

ここで考えなければいけないことは，ハーバーマスの初期の作品である『公共性の構造転換』と，その後の作品の起点となった『コミュニケーション的行為の理論』の間の議論継承関係であろう．政治思想的著作である前者と，社会学原理論的著作である後者は，同じ論旨の二つの現われであるのか，それとも両者の間には断絶が存在するのであろうか．そして，断絶が存在するならば，それはどのような断絶なのであろうか．

まずはハーバーマスの議論展開に言及した二つの記述を見てみたい．

> もちろん，「意識哲学」に基づくパラダイム・シフトを経て，第一世代のアポリアを乗り越えるべく批判理論の再構築が全面的に展開されるのは，ハーバーマス自身のキャリアにおいてずっと後になってのことである．しかし，そうした理論的試みの萌芽，さらにそのことがもたらす成果は，『公共性の構造転換』での議論にも明らかに見て取ることができる．［阿部潔 1998］(7)

> それまでの「社会理論としての認識論」という基本構想に対し，ここでは認識論と社会理論（コミュニケーション理論）とが明確に切断されており，この切れ目が，この時期における基本構想の変化を最終的に批判理論の「転回」に導いたと言えよう．……（中略）……それは社会批判の根拠をもはや「認識」ないし「認識主体」に基礎づけようとするのではなく，むしろ「社会」の日常実践のなかに根拠を埋め戻そうという意図にしたがうものである．［豊泉周治 2000］(8)

両者ともハーバーマスの２つの著作の間にある，意識哲学から言語哲学への「言語論的転回」について言及している点に違いはないが，阿部は転回前後の連続性に言及し，豊泉は切断に注目する．このような相違が出てくる理由の一つは，『コミュニケイション的行為の理論』以降のハーバーマスの議論に関する見方が異なっているからであろうと思われる．カルチュラル・スタディーズの視点を導入することによってハーバーマスを批判的に継承しようとする阿部は，次のように述べる．

> コミュニケーションによる社会化を通じて理性的主体を確立することが，近代的な生活世界の再生産にとって必要不可欠なものであることに疑問の余地はない．しかし，前節で明らかにした公共圏でのアイデンティティ形成の多様性と多元性の意義に鑑みると，アイデンティティ形成の目的を理性的討論の担い手であるコミュニケーション的主体の確立に限定して捉えるハーバーマスの認識は，一面的であると言わざるをえない．(9)

阿部は，「主体（の確立）」をめぐるハーバーマスの議論を主に取り上げ，自らの議論を進めている．これに対し，豊泉の，ハーバーマスの議論に対する焦点のあて方は異な

る．

こうして自律的公共性は，かつての市民的（ブルジョア的）公共性からはっきり区別されて，新たに規定し直される．……（中略）……すなわち自律的公共性とは，もろもろのアソシエーションを基盤とする日常のコミュニケーション実践から自生し，社会全体を視野に収めた意見と意志形成を可能とする，高次元のコミュニケーション過程であり，密度を増した政治的コミュニケーションの「高次元の相互主観性」だというのである．[10]

ハーバーマスの主張の中心は，議論を行なう主体にではなく，議論の場に成立する，いわばメタレベルの相互主観性にあるというのである．

そもそも『コミュニケイション的行為の理論』という書が，了解志向的コミュニケーションによって成立する「コミュニケーション的理性」（『コミュニケイション的行為の理論』邦訳において「コミュニケイション的合理性」と訳されていたもの）を論証しようとする企てであることを考えれば，議論の焦点は豊泉の指摘の方向にあるように考えられる．

ただし豊泉の議論も，上記引用部分の出所である彼の著書『ハーバーマスの社会理論』では，この書の入門書的性格付けの限界からか，相互主観性についての議論は突き詰められていない．同書において相互主観性の問題は「生活世界の植民地化」テーゼ――我々の日常生活における価値判断自体が経済的・政治的なものとなることによって，本来あるべき価値判断から変質していく――との関連において議論されるに留まり，生活場面の記述は相互主観性のレベルへと向かうのでなく，個人の内面的な状況の記述へと落ち込んでいく．彼の議論運びは，集合過程から遠ざかり，現代日本における「子どもや若者たちの自己形成の内部」の問題，すなわち「彼ら・彼女らのアイデンティティ危機」[11]の問題への言及において終章を迎え，集合的次元についてはギデンスの論じたライフ・ポリティクスおよびハーバーマスのラディカル・デモクラシーが，こうした問題の解決への糸口となる希望が語られるに留まる．

この豊泉の記述は，相互主観性の次元の議論から遠ざかってしまうという点では，本稿の文脈において紹介する意義は実は少ないのだが――本稿では以下で論じるように相互主観性の次元を主に問題にしていく――，豊泉の議論展開をここであえて示したのは，この議論展開を，阿部の次の記述と突き合わせてみると，興味深いからである．

このように，現在のハーバーマス理論において「発達理論」の観点から論じられる人格形成に関する議論は，アイデンティティ形成が試みられる社会的な場や関係に関する具体的な議論を欠いている．このような問題点を認識すると，主体と構造が媒介される場として公共圏概念を考えることの意義が明らかになる．ここで指摘してきたように，理性的討論過程としてのみならず，他者とのコミュニケーションを通じてアイデンティティ形成が実践される場として公共圏を捉え直すことによって，コミュニケーション的主体構成の問題を，……（略）……，具体的な社会関係／場との関連で論じることが可能になると思われる．[12]

豊泉において，まさにハーバーマスの議論（“ラディカル・デモクラシー”）に拠ることによって，解決される可能性のある課題として示唆されていたアイデンティティの問題が，阿部においては，ハーバーマスの議論における欠如として認識されているのである．

このような相違が生じる原因の一つは，阿部が主に『コミュニケイション的行為の理論』におけるハーバーマスの議論の検討を中心に議論を展開するのに対して，豊泉の議論はその後の議論展開を中心に議論している点にあると思われる．しかしもう一つの原因は，阿部の「理性的」という言葉の理解・位置づけにあるだろう．

阿部は「理性的討論過程」以外のコミュニケーションをも通じてアイデンティティが形成されているという実態を問題にせよと言う．具体的には，カルチュラル・スタディーズが論じてきたような，それぞれの社会的立場を背景としたコミュニケーション，すなわち，異なる社会的立場の表明によって生じる文化闘争が課題だと論じる．[13]そこには特権的・抑圧的立場／従属的・被抑圧的立場といった社会構造的要素が介入し，結果としてこのようなコミュニケーションが行なわれる場は「構造と主体が媒介される場」となる．阿部は，このような場をインターディシプリナリーに解明し，「公共圏を規範的準拠点としたうえで，具体的事例を対象とした個別の実証研究が積み重ねられる」[14]ことが重要であると主張する．

この議論展開で注目されるのは，「公共圏」が「規範的準拠点」とされている点である．公共圏が文化闘争の場であるならば，どのようにして規範的たりえるのであろうか？あるいはここでの「公共圏」はかつてハーバーマスがある種理想的状態として描いた市民的公共圏，もしくはそれに類似したイメージなのであろうか．

しかしそれにしても，「構造と主体が媒介される場」という阿部の記述に従うならば，そして，そこでアイデンティティの形成が行なわれるというならば，アイデンティティの形成には，社会的不平等などの構造に起因する“歪み”

が導入されそうである．

この歪みに対抗するものこそ，コミュニケーション的理性である，というのであれば理解しやすい図式である．『コミュニケイション的行為の理論』でハーバーマスが企てたことは，コミュニケーション的理性という概念の提出，理論化であった．相互了解を志向するというコミュニケーション本来の性質のみから出現してくる理性のあり方（コミュニケーション的理性）に焦点を当て，議論は展開されている．そこではもはや教養も財産も言及されることがなく，アプリオリな“理性”も退けられる．コミュニケーションという人間の行為のみを基礎として出現する理性によって，社会的文脈からもたらされる歪みに対抗する自律的な価値観が創り出されていくというのが，コミュニケーション的理性の理論であった．

豊泉の記述――生活世界の植民地化（構造によってもたらされる歪み）にラディカル・デモクラシー（コミュニケーション的理性を可能にする政治のあり方，それも生活場面に密着した層を含む）で対抗する――は，アイデンティティ形成における社会的歪みに対してコミュニケーション的理性で対抗するという，理解しやすい図式に沿ったものとなっているのだが，阿部の議論では「規範的準拠点」はなぜかコミュニケーション的理性の側ではなく，公共圏の側にある．

実を言えば，歪みを抜きにしてアイデンティティなどありえないという立場に筆者はむしろ共感するものなのだが，それはまた別の機会に論じるとして，ハーバーマスの議論を継承するのであるならば，規範的準拠点はコミュニケーション的理性の側にあるべきではなかろうか．

さて，かくして第二の“「公共圏」性”考察のための基準が明らかになる．「公共圏」が理想的な公共圏となる場合とは，了解志向的コミュニケーションの積み重ねによって，それがより高次の相互主観性――コミュニケーション的理性――を成立させる場となった場合である．人々の意見のやりとりを通して，それまでよりもより良い理解・価値判断が産み出されていくこと，及びそのようにして産み出された理解・価値判断をハーバーマスは「コミュニケーション的理性」と呼び，これを彼の議論の中心に置いたのである．ここから公共圏は評価されよう．

なお，「公共圏」概念を規範の側ではなく，実態概念の側において阿部の所論を議論しながら，改めて“「公共圏」性”という形で，規範的性格を再び「公共圏」の語に付加するのは，一貫性がないように見えるかもしれない．しかしそれにも関わらずこの言葉を用いるのは，本稿での用語法上の理由である．本稿では，事実としての公共圏をまず念頭に置いた上で，次に，ハーバーマスの規範的議論が実現される場としての「公共圏」を想定し，そこで実現されるなんらかの理想として“「公共圏」性”の語を用いている．

さて，ここで一点，付言しておきたい．『公共性の構造転換』における公共的議論成立に関する「教養と財産」という定式化は，ハーバーマスの意図があくまで継続的に生産的な議論を行なうための条件という点にあったとしても，いかにもエリート主義的で，社会的に抑圧された人々の発言を排除する抑圧装置となりそうである．そして実際，この点においてハーバーマスの議論は批判を受けてきた．『コミュニケイション的行為の理論』は，社会学理論考察の書であり，実は公共圏についてほとんど記述していない．しかし，この本は，ハーバーマスの公共圏論のエリート主義的傾向への批判に対する回答という実践的意味を持っていたのである．ここで回答されたのは次の質問だったのである．「教養と財産」というエリート主義的条件を外した場合，「世論」が単なる「意見」とは違う，民主主義の基盤たる“世論”となる資格を持つために，どのような条件が必要なのであろうか？　これに対し，了解志向のコミュニケーションが理性（コミュニケーション的理性）を産み出すことによって，というのがその答えだったのである．

『近代の哲学的ディスクルス』においては，「地域的な公共性と地域を越えた公共性，文学的，科学的，および政治的公共性，党派内部でのあるいはそれぞれの団体に特殊の公共性，メディア依存型の公共性やサブカルチャー的な公共性など」と，様々な公共性が列挙され，[15] これらが言説（ディスクルス）として包括的な公共性へ結びつくとされる．[16] そして『事実性と妥当性』においては，次のような記述がある．

> コミュニケイション的理性を実践的理性から区別する点は，何よりもまず，コミュニケイション的理性がもはや個々の行為者，あるいは国家や社会というマクロ主体に帰せられるものではない，という点である．むしろコミュニケイション的理性を可能にするのは，相互行為の網の目を作り出し，生活形式を構造化するための言語媒体なのである．その合理性は，了解という言語的テロスに由来するものであり，了解を可能にすると同時に制約する諸条件の調和ある結合体を作り出す．[17]

ここで注目すべき点は，まず，コミュニケーション的理性が個々の行為者やマクロ主体を超えたレベルで成立することが言われている点であり，次にその起源が了解という言語の本来的な性質にあると言われている点であり，そして，言語的実践を通じて発現するはずのこの理性が個別の条件において制約されているという，個別性・多様性への配慮であろう．

『事実性と妥当性』では，理想としての公共圏ではなく，現実としての公共圏が議論され，伝統的な言論の場であるマス・メディアの提供する議論空間が「メディア公共圏」と呼ばれる.[18]そこにおいてメディアが本来の言論機関として機能せず，世論操作において大きな力を持つことが「メディア権力」と呼ばれる.[19]ここでは，公共圏は価値を担う概念ではなく，単に場を指す言葉として使用され，価値評価の軸は，コミュニケーション的理性に絞られる.『公共性の構造転換』で見られた，Öffentlichkeit（公共性・公共圏）という言葉の二面性（実態／理想）は，ここにおいて整理されたと言うことができよう．同様の整理は『事実性と妥当性』出版に2年先立つ『公共性の構造転換』1990年版への序文でも行われており，ブルジョア市民社会（bürgerliche Gesellschaft）は，市民社会（Zivilgesellschaft）から分離されている．かつて前者の市民社会的公共圏が理想たりえたのは，特定の歴史的・社会的コンテクストの中で，その場においてコミュニケーション的理性が発現していたからということになる．

このようにして，『事実性と妥当性』では，分析は多様な場を対象としたものとなり細分化される．コミュニケーション自体も，特定の枠組みではコミュニケーション的理性を生じさせることのないものとして扱われる.「コミュニケイション権力」と，めったに理想的には作用しない議会内での討論が呼ばれる.[20]こういった状況分析の上に，「国家から区別された自律的な公共的アリーナ」[21]のネットワークを機能させることによって，最終的に民主主義を保障する（しなければならない）という議論が展開されていく．

> かつてヘーゲル哲学の諸概念によって結びつけられていた内容は，今日では，法理論，法社会学，法史，道徳理論，社会理論といったさまざまなパースペクティブにもとづく多元主義的方法によって扱う必要があるからである．／……（略）……このようなやり方を取ることで，私は，しばしば誤解されているコミュニケイション的行為の理論の多元主義的構造を明らかにすることができるからである.[22]

『事実性と妥当性』においてハーバーマスは，このようにして，多様な対象を多元的に解き明かす作業を遂行していく．

さてしかし，本稿の目的はハーバーマスの議論を追っていくことではない．以下では，インターネット言説の分析を実証的に行なっていく．議論のポイントは既に示した通りである．インターネット言説は現在，どのような状況にあるのであろうか．

## 2．分析対象

本稿では，わが国最大の掲示板サイトである「2ちゃんねる」を取り上げ，分析対象とする．インターネットの一般への普及と共に巨大化したサイトであるので，電子ネットワークの現在を考える上で好適な対象といえよう．このサイトの圧倒的な規模についてはしばしば言及されるところである．今回の分析では，わずか3つの掲示板への書き込みを収集しただけであるが，その数は50万件を超えた．

具体的には，この「2ちゃんねる」の「ニュース速報」掲示板内のイスラム情勢関係の掲示板3つを分析対象とした．9.11テロ以後のアメリカを中心とする多国籍軍のアフガニスタンおよびイラクでの戦争は，現代国際社会の直面する重大な課題となっている．この問題に関して活発な書き込みが行なわれた掲示板は，公共圏という視角からインターネットを分析する際の対象として適切であろう．

なお，この対象を選ぶには，もう一つの理由がある．かつて筆者は，1991年湾岸戦争当時のNIFTY-Serve内の電子会議室を分析した．この事例と比較対照し，電子ネットワークにおけるコミュニケーションの変容を分析するためにも，9.11テロ以後の国際情勢は，適切な話題であろう．

取り上げた「ニュース速報」掲示板内の3つの掲示板は以下のようなものである.「ニュース速報」掲示板では，2001年9月11日の国際貿易センターへ旅客機が突っ込むというテロの発生直後から「news 3臨時＠ニュース速報」掲示板が立ち上げられ，後述のように大量の書き込みが行なわれた．その後，この問題に関わる書き込みは，臨時ニュースではなく，イスラム情勢を扱う「イスラム情勢（タリ板）＠ニュース速報」へと移動する．この掲示板では，アフガニスタンおよびタリバーン情勢についての書き込みが行なわれるが，政治・軍事状況が，イラクを中心とするものになるのに伴って2003年3月，「イラク情勢＋」掲示板が開設され，書き込みの中心もそちらに移動した．本研究で情報収集・分析を行なったのは，この3つの掲示板「news 3臨時」，「イスラム情勢（タリ板）」，そして「イラク情勢＋」である.「2ちゃんねる」のそのほかの掲示板においても，アフガニスタン・イラク情勢は議論の対象となっているが，掲示板として明確に課題が設定され，大量の書き込みが続けられた場はこれら3つの掲示板のみである．

## 3．データの所在とデータ収集上の問題点

これらの掲示板への書き込み内容の入手は，「2ちゃんねる」に設置された「過去ログ倉庫」から行なった．しかし，ここにはいくつかの問題点が存在している．まず，「過去ログ倉庫」が完全なものではないと思われることである．も

ともとボランタリーな掲示板として始まった「2ちゃんねる」では，過去ログの作成も，掲示板提供者とその協力者の自発的な活動であって，商業サービスで保証されるような完全性を期した性格のものではない．そして，より大きな問題は，「2ちゃんねる」のサーバーがクラッシュを経験していることである．それも，9.11テロ後，アクセスが最も集中すると考えられる時期にである．このため，この時期の過去ログに，かなりの混乱を見いだすことができる．

具体的には，「news 3臨時」のログは「piza 2サーバ」に収録されているが，2001年09月13日の書き込みまでしか見ることができない．もっとも，9月11日からの3日間で書き込み量はスレッドにして528スレッド，書き込み数にして20,310件と膨大なものであるのだが．

「イスラム情勢(タリ板)」については，より多くのスレッド／書き込みが残されているのだが，それだけに状況はかなり複雑なことになっている．過去ログ倉庫では「#news51020」といった名称で，いくつかのスレッドがまとめられて登録されているのだが，これがいくつかのサーバーに分散して残されている．「news サーバ」には#news51002〜#news51026(ただし#news51024は存在していない)，「news 3サーバ」には#news51025〜#news51065，「corn サーバ」には#news51025〜#news51039，「news10サーバ」には#news51053〜#news51081といった状況である．しかも，これは単に分散して置かれているだけではなく，収録内容にも異同がある．以下，どのようにデータ収集を行なったか，列挙しておく．

#news51002〜#news51023 「news サーバ」のみに収録されているのでそれを採用．

#news51024 所在を確認できず．

#news51025 「news 3サーバ」には67スレッドが収録されているが，このうち31スレッドは2回づつ重複収録(しかも重複ケース間で収録書き込み数に違いが存在)．他方，「corn サーバ」には34スレッドが収録されており，書き込み数は「news 3サーバ」の重複ケースの書き込みの多い方と一致．「news 3サーバ」から，重複ケースでは書き込みの多い方を採り，36スレッドを採用．

#news51026 「news 3サーバ」には「corn サーバ」の2倍の34スレッドが収録されているが，すべて2回重複しているので，収録スレッド数は実質同等．書き込み数は「news 3サーバ」の重複スレッドのより多い方と「corn サーバ」で一致．「corn サーバ」の17スレッドを採用．

#news51027 同前の状況．「corn サーバ」の15スレッドを採用．

#news51028 ほぼ同前の状況だが，1スレッドだけ「news 3サーバ」でも重複していないものがあり，「news 3サーバ」45スレッド，「corn サーバ」23スレッド．「corn サーバ」の23スレッドを採用．

#news51029 #news51026と同様の状況．「corn サーバ」の28スレッドを採用．

#news51030 「news 3サーバ」44スレッド，「corn サーバ」23スレッド収録．「corn サーバ」の23スレッドは「news 3サーバ」に含まれるので，「news 3サーバ」の44スレッドを採用．

#news51031 「news 3サーバ」51スレッド，「corn サーバ」88スレッド収録．「news 3サーバ」の51スレッドは「corn サーバ」の88スレッドに含まれるが，スレッドへの書き込み数は「news 3サーバ」の方が多いので，「news 3サーバ」の51スレッドと，「news 3サーバ」に含まれない，37スレッドについて「corn サーバ」のスレッドを採用．

#news51032〜#news51038 同前の状況．収録書き込み数の多い「news 3サーバ」に含まれるスレッドに，「news 3サーバ」に含まれない，「corn サーバ」のスレッドを付加して採用．

#news51039 「news 3サーバ」48スレッド，「corn サーバ」4スレッド収録．収録書き込み数も「news 3サーバ」が多いので，「news 3サーバ」の48スレッドを採用．

#news51039〜#news51052 「news 3サーバ」のみに収録されているので，それを採用．

#news51053〜#news51065 「news 3サーバ」と「news10サーバ」に収録．スレッド数，含まれる書き込みとも「news 3サーバ」が多いので「news 3サーバ」のスレッドを採用．

#news51066〜#news51081 「news10サーバ」のみに収録されているので，それを採用．

なお，「news 3サーバ」では，html化される前の「dat形式」で収録され，そのまま放置されているように見える．

「イラク情勢＋」掲示板については，「news10サーバ」のみに収録されている（#news5plus1048〜#news5plus1082）ので，それを採用した．

このようにして収集したデータであるので，必ずしも厳密な議論が可能なわけではないが，一定の傾向を見て取ることはできると考えられる．ちなみに，総収集スレッド数と書き込み数は，「news 3臨時@ニュース速報」528スレッド，書き込み数20,310件．「イスラム情勢（タリ板）」4,907スレッド，書き込み数396,003件．「イラク情勢＋」2,224スレッド，書き込み数229,239件となった．「イラク情勢＋」については，ログ収集を行った2004年5月末時点で活発に収録スレッド増加中であった．

今回の分析では，データ収集時点において，過去ログの収録が完了していると思われる時期という観点からと，イラクで起こった日本人人質事件についての書き込みが始まる前という二つの理由から，分析期間の終わりを2004年3月31日とした．このあと，日本人人質事件について膨大な書き込みが行われることになるのだが，日本人が直接事件当事者となっていることから，湾岸戦争時のデータとの比較などにおいて，事件の性格が異なる（国際情勢に関する議論とは言えない議論が多出した）と判断したためである．

今回の分析対象とした，2001年9月11日から2004年3月31日のタイムスタンプをもつ書き込みは，「news 3臨時@ニュース速報」20,310件，「イスラム情勢（タリ板）」395,979件，「イラク情勢＋」54,924件，合計471,213件であった．

なお，これらと比較する対照データ収集のため，朝日新聞社の記事データベース「聞蔵（きくぞう）」を利用した．以下で言及される「朝日新聞記事」は，「アフガン」「アフガニスタン」「イラク」「イスラム」のいずれかの語を含む記事で，2001年9月11日から2004年3月31日という期間設定において，聞蔵で検索したものである．なお，あらゆる関連発言が含まれる電子掲示板と比較のためなので，データ検索にあたっては聞蔵の検索オプションとして，東京・大阪・名古屋・西部（福岡）・北海道の各本社発行版すべて，朝・夕刊，本紙・地方版すべてを対象とした．

## 4．書き込みの全体的傾向

書き込み一件あたりの平均文字数は，「news 3臨時@ニュース速報」55.3字，「イスラム情勢（タリ板）」103.0字，「イラク情勢＋」71.5字であった．この字数は朝日新聞の記事平均808.4字と比較して著しく少ない数字と言うことができる．なお，2ちゃんねる掲示板の字数のカウントにあたっては，html文書タグ（ハイパーリンク先を含む）および改行コードを除き，アスキー・アートについてはそのままカウントしている．また，朝日新聞記事の字数については聞蔵の検索結果表示画面に表示される「字数」から計算している．

この平均文章長の著しい短さはどのように考えるべきだろうか．掲示板においては，単に書き込み番号の早い番号を「ゲット」したことを示す例えば「2」という数字一字だけの書き込みや，同じくキリ番「500」だけを書き込んだもの，あるいは，短い決まり文句のみの書き込み（たとえば「おまえモナー」や「逝ってよし」など）が存在し，こういったものが全体の平均字数を引き下げているということが考えられるかもしれない．そこで，朝日新聞記事の平均文字数を念頭に，800字以上の書き込みについてカウントしてみた．しかし，800字以上の書き込みは「news 3臨時@ニュース速報」71件，「イスラム情勢（タリ板）」4,331件，「イラク情勢＋」2,000件，と，それぞれの掲示板への書き込みの，0.3%，1.1%，0.7%を占めるに過ぎず，しかも，その過半数以上がアスキー・アートで占められている状況であった．1991年湾岸戦争の際，朝日新聞記事平均字数900字程度に対してNIFTY-Serve現代思想フォーラム「現代世界室」における書き込みが平均1,900字程度であったのと較べると，やはり極端に短いということができよう．

書き込み数の経時的変化については，図1のようになる．

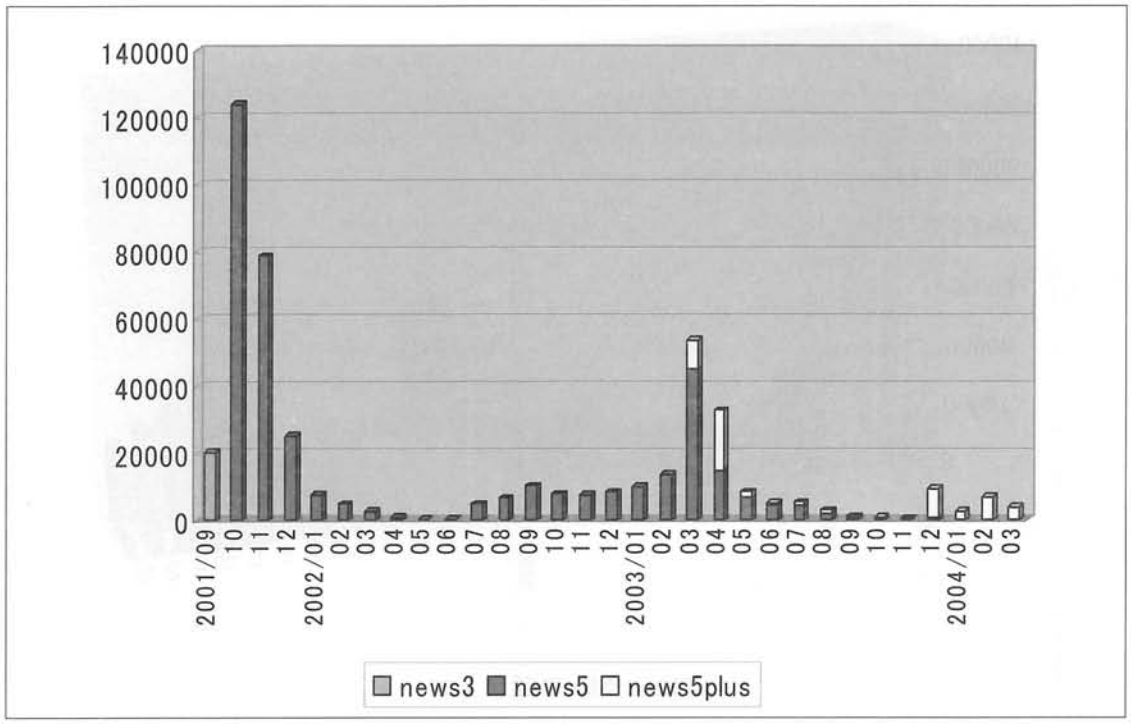



**図1　2ちゃんねる3掲示板における書き込み数の推移**

2001年9月～10月初旬についてはデータが散逸しており，上図よりもかなり実際の書き込み件数は多いと考えられる．

これを朝日新聞記事件数の推移（図2）と比較してみよう．

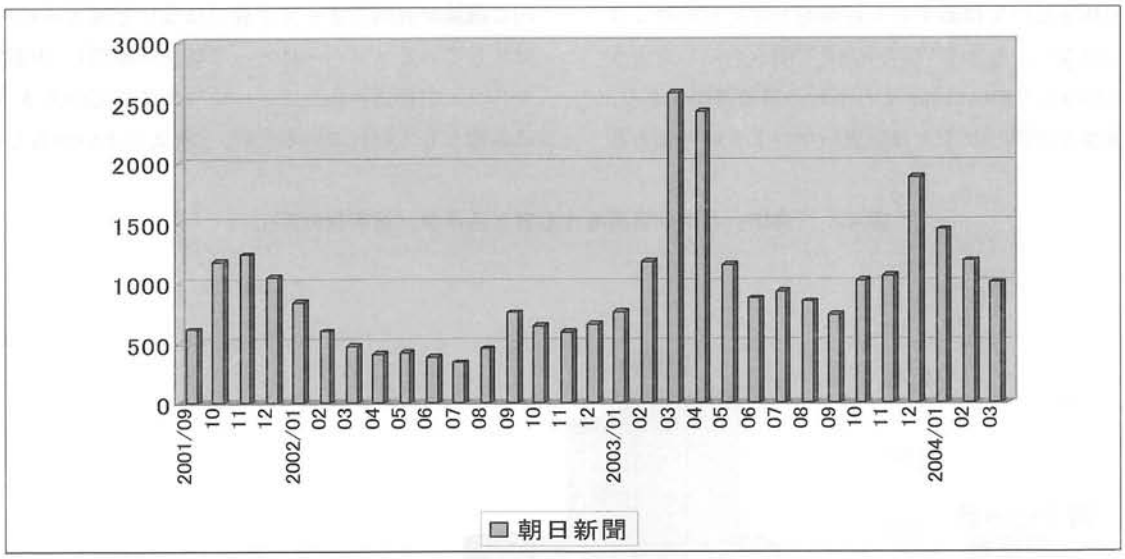



**図2　朝日新聞における9.11テロ以後の関連記事の推移**

件数の差が大きいので，朝日新聞の記事数を25倍にして，同一グラフ上にプロットしてみたのが図3である．

話題となる出来事の性質の違いによってか，ピークの高さは異なるが，全体に増減の傾向はよく似通っていると言うことができるだろう．

ちなみに1991年湾岸戦争における前記会議室における書

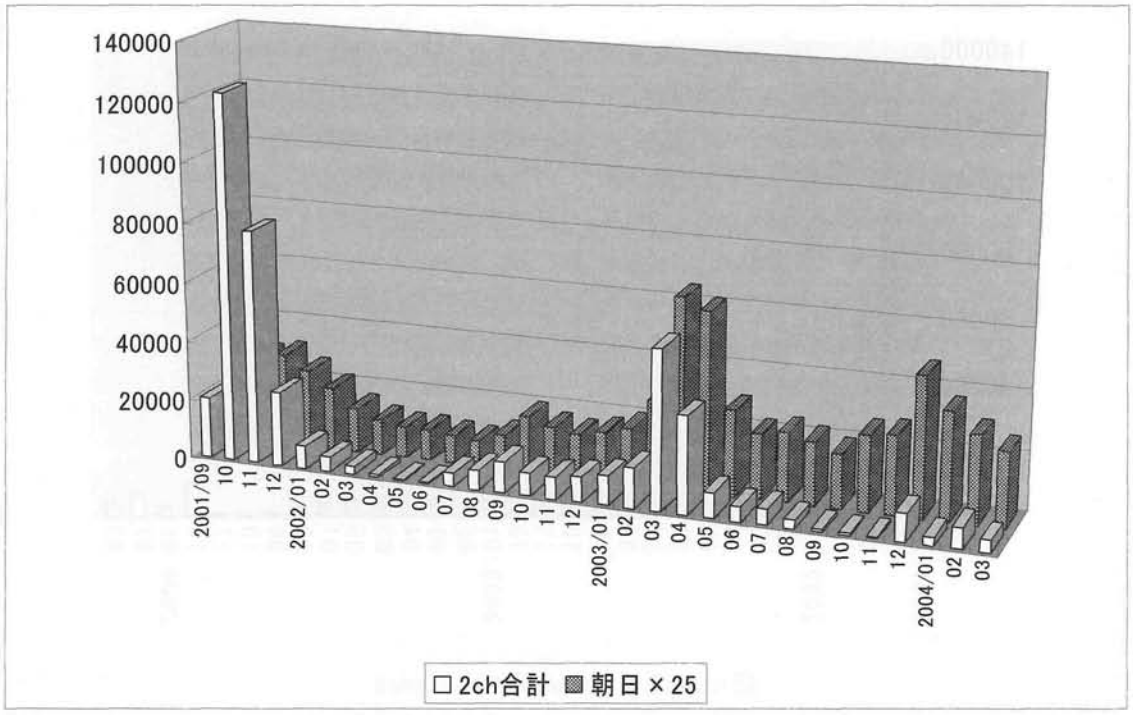
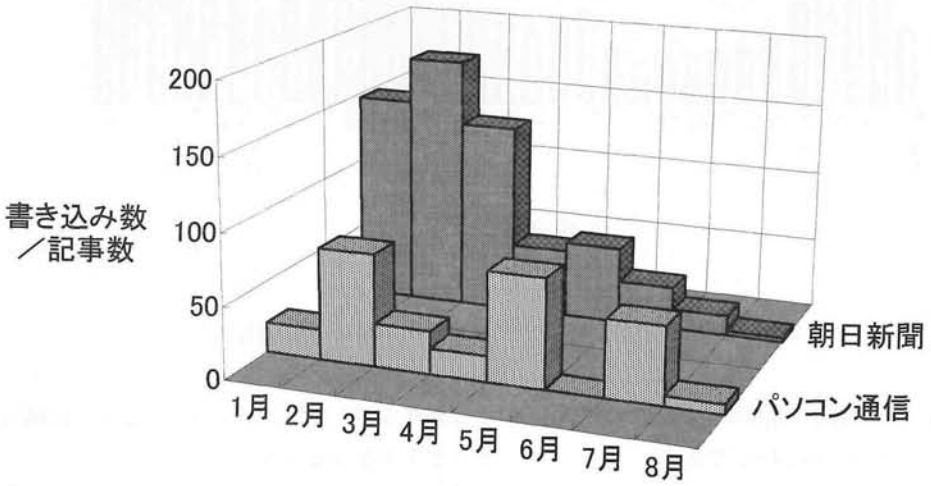



**図3　9.11テロ以後の書き込み数／新聞記事数の推移**

き込み量と朝日新聞の記事件数の変化を図4に掲げるが，そこではメディアの報道傾向とははっきり異なった形でネットワーク上の発言に増減が生じており，自律的に議論が展開された跡が見て取れる．もちろん，収集された書き込み／記事の件数が今回よりもかなり少数である湾岸戦争事例では，数字のばらつきが大きくなることが予想されるので，この数字だけでは必ずしも自律的と言えるわけではないかもしれない．しかし以前の研究で明らかにしたように，書き込みの3つの山には，それぞれの議論課題があり，自律的に議論が展開したことは間違いないように考えられる．[23]

これに対し，2ちゃんねるでは反応の大きさに違いはあるものの，概ねメディアの議論状況に対応して書き込みが進められていると言って良いのではなかろうか．そもそも，書き込み一件あたり平均字数55.3字，103.0字，71.5字という字数は，何かに対する寸評は可能であるにしても，自律的に議論が展開できる文字数ではないと考えられる．アクセスしているメンバーにとって既知の事項（＝実質的には，マスコミで報道されたこと）に対する反応の大きさが書き込み数として現れているだけ，と考えてよいかもしれない．

**図4　「湾岸」という言葉を含む書き込み数／記事数の変化**



## 5．「公共圏」として

既にある程度，評価を行なってしまったが，以上のような2ちゃんねるの書き込みの状況は，「公共圏」としてどのように評価することができるだろうか．

まずとりあえず第一の“「公共圏」性”の基準から見てみよう．現在妥当するかどうかはともかくとして，近代的なブルジョア的公共圏が市民的公共圏として機能し得た際の条件が，ここでは成立しているのであろうか．3つの条件が検討課題であった．①参加者が個別利害を離れ，②蓄積的に議論を積み上げ，③（権威ある）世論を産み出しているのか，という条件である．最後の③については，現状では権威あるものと認められないことは既に記した通りであるが，前二者が実現されれば，いずれは③も満たされていく可能性があるかもしれない．

①については，「ネットワークの匿名性」と呼ばれるものがネットワーク上の議論では有利に働く可能性が高い．既に記したとおり「ネットワークの匿名性」と言っても，現実にはシステム管理者からはIPアドレスによる追跡が可能であり，また，これを放棄している2ちゃんねるにおいてさえも，「ID」として発信パソコンは特定され，表示されていることから，論者を追跡することは可能で，ネットワーク上に匿名性はほとんど存在していないのだが，議論参加者からとりあえず相手の属性が見えないことは，議論参加者の属性志向のコミュニケーションではなく，議論内在的な問題に志向したコミュニケーションの成立を促進すると考えられる．1991年湾岸戦争の際のNIFTY-Serveにおける議論でも，個別利害の表明と見えるものは少なく，普遍的な価値の追求がなされていた．[24]しかしそれも，平均書き込み字数が1,900字程度のNIFTY-Serve会議室においてのことであり，今回のケースのように，55.3字／103.0字／71.5字という状況では，課題についての充分な議論がなされるとは考えづらい．

②の議論の蓄積性については，ネットワーク・コミュニケーションにおいては「教養」といったことを言わなくとも，引用ヘッダ，書き込み参照（「>> 34」といったもの）によるツリー形成，および，書き込みの中で使われる「前スレ」（以前のスレッド）という言葉を，直接，議論の蓄積性と関係するマーカーとして状況を分析することも一つの方法であろう．

書き込み参照（「>>」という文字列）を含む書き込みは，「news 3臨時@ニュース速報」3,487件（この掲示板全書き込みの17.2%），「イスラム情勢（タリ板）」122,234件（同30.9%），「イラク情勢＋」88,882件（同31.3%）であった．「前スレ」という言葉を含む書き込みは，「news 3臨時@ニュース速報」11件（同0.05%），「イスラム情勢（タリ板）」647件（同0.16%），「イラク情勢＋」476件（同0.17%）であった．スレッド内では，書き込み間に緊密な参照の連鎖が存在することを伺わせる数字であると考えられるが，もともと数十字からせいぜい100字程度の書き込みでは，参照関係によって寸評的に言葉を繋いでいくしか書き込みようがないとも言え，これをもって「蓄積性」と呼べるかは難しいところである．スレッド間の参照関係については，「前スレ」という言葉によって測定する限り，かなり希薄であるということが言えよう．

このような状態から2ちゃんねるを考えるとき，ブルジョア市民社会的公共圏が成立する可能性はほとんどないと言わざるを得ないだろう．それどころか，説明抜きの寸評の連鎖は，ある決まりきった価値観の繰り返しであるほかないと考える方がより妥当であり，かつてハーバーマスが構想した対話的で批判的理性を備えた市民社会的公共圏とは，全く反対の存在であるように考えられる．

このような状態では，第二の“「公共圏」性”考察のための基準――コミュニケーション的理性の発現――について議論してみる必要は無いように思われるが，一点だけ指摘しておきたい．『近代の哲学的ディスクルス』以降，ハーバーマスが評価できる公共圏に対して付与する形容詞が「自律的」の語である．図3は，2ちゃんねるという議論の場が，自律的ではないことを明確に示す図ではなかろうか．

問題や矛盾を抱えた社会に対する批判の場として，そして，コミュニケーション的理性の発現の場として，「公共圏」は期待されている．了解志向のコミュニケーション行為を行なうとき，人は自らの価値観について考え直さざるを得ない状況に立ち至る．コミュニケーションという行為は，他者に自らの意見を押し付けるだけの一方的な行為ではなく，相互了解を志向する行為だからである．ある時，ある者が当然のこととして発言したことが，他の者には当然とは思えない．この時，このすれ違いが，その理由を対話を通して考えていくことに繋がり，それがさらに前提となっていた既存価値観の妥当性を検討せざるを得なくなっていくならば，それは（既存価値観を前提として営まれている）社会に対する批判的モーメントとして社会に作用することになる．公共圏は，このようにして批判的理性を生じさせる場として期待された．実際に社会に対する批判的モーメントとして機能したかどうかはともかくとして，ネット上の議論ではかつて，コミック同人誌におけるエロ表現に関する議論が，単なる表現の是非の問題を越え，子どもの権利宣言の原理の検討に到るまでの議論に到る例を見いだすことができた．そこでは対話によってこそ普遍的な価値の探索が可能になるといった，コミュニケーション理性と表現するほかない事態が生起していた．[25]

しかしネットワーク・コミュニケーションの大衆化段階

において，「言語的テロス」は，力を失っているように見える．多様なものの見方が広がるよりは，固定的で一方的な寸評のみが幅を利かせているように見える．実際，「２ちゃんねるの影響」といったキーワードを用い，検索サイトでインターネットを検索してみれば，２ちゃんねるを評する例えば次のような書き込みを見つけることができる．

> ２ちゃんねるの影響でしょうか，私の意見もかなり一方的になってきてしまいました．
> (http://members.at.infoseek.co.jp/saihikarunogo/yahoohikiluna0001.html 2004/06/29)

ネットワーク・コミュニケーションの大衆化段階は，コミュニケーション的理性の黄昏なのであろうか．

## ６．もう一つの批判性？

さてしかし，それでは２ちゃんねるとは，何なのであろうか．「イスラム情勢（タリ板）」のみでも396,003件，総文字数40,782,018字という数字は，あまりにも巨大な数字である．議論が展開しないと言うならば，そこで「語られて」いることは何なのであろうか．

２ちゃんねる一般について言われていることに，差別的な言辞の頻出，および，「祭り」に象徴されるような，ある種の仲間意識の確認行為への嗜好性，がある．１点目はもちろんのことながら，第２の点についても，肯定的な議論をする者は多くない．「仲間意識の確認」とは他者の排除であり，この意味で第２点目は第１点目とそう異なるものではない．前節の議論を引き継げば，所与の価値観の共有を前提として，言葉の投げかけや行為がなされるのであって，対話的に議論が展開する状況とは程遠い場が，２ちゃんねるである．

ただし否定的に論及されながらも，より具体的な，例えばコンピュータ機器の利用に関する掲示板などでは，「前スレ見とけ，ゴルラァ」といった冷たいレスが多くある一方で，実際に「前スレ」に有益な情報が蓄積されていることもあれば，そうは言いながらも援助的な書き込みをする者が現れてくるケースも多く，こういった意味では，充分に「インフォーマティブ」で，有益な場となっていることも確かではあるのだが．

いずれにせよ，様々に批判されながらも，充分な吸引力を持って２ちゃんねるが存在しているという事実は，コミュニケーション的理性といった視点とは別に，この２ちゃんねるという存在を考えてみることを要求している．

ここで発想を転換してみることが必要かもしれない．P.ブルデューの議論は，“知識人の批判性”に関する，ある強烈な批判を提示している．[26]すなわち，文化資本を自らの階級的基盤とする「知識人」は，言葉を駆使する“批判ゲーム”において有利な立場に立つことによって，自らの特権的地位を維持する社会的存在なのである．言説を通しての議論とは，知識人階級の戦略的資源なのである．

このように考えてみるとき，２ちゃんねるにおいて頻出する反左翼言説――「サヨ」といった言葉で，無前提に左翼は嘲笑の対象となる――の社会的含意も明確になるだろう．なんらかの社会科学的知識を背景に現実の変革を目指す左翼的言説が，知識人の文化資本戦略と一致することをブルデューは議論した．２ちゃんねるにおける反左翼言説は，文化資本体制に対する拒否の態度の表明であるのかもしれない．そして対話性を拒否しているとしか思えない書き込みの形式自体が，すぐれて文化資本支配的な言説空間に対する否定活動なのかもしれない．２ちゃんねるにおいて，左翼と共に，マス・メディアが主要な攻撃対象となるのも，同様の理由によるだろう．現在の文化上の威信体系こそが批判されていると考えるべきだろう．NIFTY-Serve 的議論空間から２ちゃんねる的表出空間への変化は，電子ネットワークがエリート・メディアから大衆メディアへと性格を変えていく中で，当然起きるべくして起きた変化と言うことができよう．

もし，２ちゃんねる的言説が言論空間を席捲していき，対話的な空間が常に嘲笑の対象として葬り去られていくのであれば，それはまた大きな問題であろうが，現実にはネットワーク上でさえ，そのようなことは実際に起こっていない．検索サイトで検索をかけてみれば，２ちゃんねるに対する反感もまた，根強いものがあることがわかる．

電子ネットワークの普及・大衆化において，極めてはっきりとしていることがある．それは，社会における言説状況の可視性の高まりである．かつて家庭内に押し込められて来た女性“主婦”の言説も，仕事の場から外に出るとほとんどものを語る場を持っていなかったサラリーマンの言説も，就職先物色中のフリーターの言説も，大学教員の言説も，すべてネットワーク上では横並びで，容易に読むことができる．アクセスするホームページのレパートリーが限られるという意味で，この言説空間はそれほど開かれているわけではないという見方もあるが，検索サービスは，人々の属性を無視して，ひたすら横並びに情報を提示し，クリックを促す．この状況は，藤原帰一が論壇について述べた次のような言葉と，大きく異なる．

> ……読者も，自分の立場を代弁する雑誌を選ぶのだろう（日本国憲法の支持者が『正論』を読むだろうか？）．雑誌も読者も棲み分けているだけに，異なる意見を持つ人びとが互いに議論することはない……略

（朝日新聞2004年3月22日「論壇時評」）

可視性の高まった言説空間において，言語の持つ本来的な了解志向の性質，言語的テロスは，いずれその力を発揮することがあるのであろうか．そうなれば，コミュニケーション的理性は，かつてない規模で現前することになるのだろうか．いずれにせよ，既に，2ちゃんねるのような場も含んだ，言説空間を我々が手にしてしまったことは確かなのである．

※本研究は財団法人電気通信普及財団の研究助成を受けて実施されました．記してここに感謝の意を表わします．

（1） ユルゲン・ハーバーマス（三島憲一 他訳）1985=1990,1999『近代の哲学的ディスクルスII』岩波書店，pp.616-617

（2） 杉山あかし 1999 「社会的コミュニケーション過程の情報化と生活世界」（『講座社会学(8)社会情報』92-109頁 東京大学出版会）． 杉山あかし・藤田高弘 1995 「電子空間の社会的可能性」（『比較社会文化』1巻1-11頁 九州大学大学院比較社会文化研究科）． 杉山あかし・藤田高弘 1993 「公共圏の新展開――湾岸戦争とパソコン通信」（『社会科学論集』33集67-110頁 九州大学教養部社会科学研究室）

（3） ユルゲン・ハーバーマス（細谷貞雄・山田正行 訳）1962=1973『公共性の構造転換』未来社，90年版序文付きは1990=1994

（4） 吉田純 2000『インターネット空間の社会学: 情報ネットワークと社会と公共圏』世界思想社． 干川剛史 2001『公共圏の社会学: ネットワーキングによる公共圏構築へ向けて』法律文化社 など．

（5） 前掲『公共性の構造転換』p.131

（6） ユルゲン・ハーバーマス（河上倫逸 他訳）1981=1985,1986,1987『コミュニケーション的行為の理論』（上）（中）（下）未来社；（上）p.17

（7） 阿部潔 1998『公共圏とコミュニケーション――批判的研究の新たな地平――』ミネルヴァ書房 pp.77-78

（8） 豊泉周治 2000『ハーバーマスの社会理論』世界思想社 p.18

（9） 前掲 阿部 pp.268-269

(10) 前掲 豊泉 p.183

(11) 前掲 豊泉 p.237 および，同書 終章

(12) 前掲 阿部 p.271

(13) 前掲 阿部 p.272-284

(14) 前掲 阿部 p.289

(15) 前掲『近代の哲学的ディスクルスII』p.616

(16) 前掲『近代の哲学的ディスクルスII』p.617

(17) ユルゲン・ハーバーマス（河上倫逸 他訳）1992=2002『事実性と妥当性』（上）未来社 p.19

(18) ユルゲン・ハーバーマス（河上倫逸 他訳）1992=2002『事実性と妥当性』（下）未来社 p.108

(19) 前掲『事実性と妥当性』（下）p.110

(20) 前掲『事実性と妥当性』（下）p.70

(21) 前掲『事実性と妥当性』（下）p.98

(22) 前掲『事実性と妥当性』（上）p.9

(23) 前掲 杉山1999 p.96

(24) 前掲 杉山・藤田1993

(25) 前掲 杉山1999 pp.99-100

(26) P.ブルデュー（石井洋二郎 訳）1979=1989,1990『ディスタンクシオン』(I)（II）藤原書店． P.ブルデュー（石崎晴己 東松秀雄 訳）1984=1997『ホモ・アカデミクス』藤原書店